街に出かけた
シオリが帰ってこない

DOUJIN
Adult Only R18

注意

この物語はフィクションです。
現実において同様の行為を行うことは
女性の尊厳を著しく傷つける重罪であり
法の下に厳罰に処されます。

また、本作を無断でインターネットにアップロード
する行為もまた法律により禁じられております。

あらすじ

体調不良で道端で休んでいたシオリのそばを通りかかった荷馬車のおじさんが馬車に乗せてくれるというので、荷台に乗ったシオリはおじさんの出してくれた水を飲みながら荷台に揺られるうちに寝入ってしまう。そしてシオリを乗せた馬車は街道を外れ、人気のない小道へ…。

MEMO
おっさんは危ない薬売り
(本文で説明する余裕がなかった…

「やれやれ」
男は小さな寝息を立てるシオリを見降ろして小さくつぶやいた。
「最近はトワイライトキャラバンやメルクリウス財団の連中のおかげでとんと商いが上手くいかなくて参っていたが、今日はツイてるぜ」

「こんな上玉抱けるチャンスなんか滅多にねえ」
男は注意深くシオリの弓矢や腕甲を外し、
空いた木箱の中に隠してからシオリの身体
をうつ伏せに寝かせた。
やわらかく膨らんだ尻肉に指を埋めたり、
股間のスジをなぞったりしながらシオリの
身体を楽しむ男は、ふと荷馬車の隅に転がる
水筒に目を向ける。

「最初の薬の効果が切れるのはそろそろか」
「いまのうちに準備を済ませておくとしよう」

シオリの脚を大きく開かせて股間に顔をうずめ若い女の匂いをいっぱいに吸い込む。パンツをずらして毛も生えていないヴァギナをあらわにすると、無遠慮に舌を這わせ、卑猥な音を立てながら責めたてた。

「んん・・・あ・・・あ・・・」
シオリは与えられた性の刺激にくぐもった声をあげて反応し、その声は男をさらに興奮させていく。

続けてシオリの小ぶりながらに形のいい乳房が晒させた男は
すでにかたく立ったピンクの乳首を片方の手の指で転がしながら
空いた手でおなか、太もも、そしてしっとりと濡れはじめたシオリ
のヴァギナをなでる。

ゆるやかな刺激にもシオリは小さく声上げて反応を返し、
男のペニスはシオリの出すメスの匂いに、すでに大きくなっていた。
男はシオリのヴァギナに直に指を入れ、膣がほぐれてきたのを
確認すると、シオリのパンツを脱がせ、横たえた自らの身体の上に座らせた

シオリ視点――
馬車に揺られて眠ってしまっていた私は
慣れない感覚に目を覚ましかけていました。

そんな私の身体を立たせる感じ、そして
お尻の下に感じる奇妙な感触に対する
疑問に、私は目を開けました。

「おう、いいタイミングで起きたな、お嬢ちゃん」
私の下からおじさんの声が聞こえました。
「え？……えっ？」
状況の理解が追い付かない私に、
おじさんはそれを教えるように
言葉をつづけました。

「やっぱり最初に女に入れるときは
反応がなきゃつまらないからな」
その言葉に、私はようやく陥れられた
ことに、そしていままさに犯される
瞬間であることを理解したのです。

「やっ…！いや！やめてください！」
抵抗しようと身をよじろうとするも
私の身体は力が入りません。
「まだ薬が残ってるだろう」
おじさんは余裕そうに言うと
一気に私の身体をペニスで
貫きました。

「あっ！？あああああっ！」
身体の奥深くに感じる異物感と痛み
そして経験したことのない感覚に
私の口からは普段からは考えられない
ような声が飛び出しました。

「さすがにキツいな。だがそんなに痛くないだろう？
あの水筒には、女を〝その気〟にさせる
薬も入れておいたからな」
そういいながらおじさんは
私の身体をゆすり、私の
ナカを責め始めました。

「あんっ！あぁっ！！や、やめ――ッ！」
頭で感じる不快感や拒否感とは裏腹に
私の身体はすでに男性を迎え入れる準備が
整っていて、膣からは卑猥な音が聞こえます。
外気にさらされた乳首は赤く、硬く立って
おじさんが私が目を覚ますよりずっと前から
私の身体を弄んでいたことを教えていました。

「あっ！あんっ！はぐっ！」
信じたくないことですが、私の身体は
おじさんのペニスをすっかり受け入れ
快感を伝え始めていました。
「おお。子宮が下がってきたな
それじゃそろそろ一発いくか」
「！？」

なにをいくのか、経験のない私も直感的に理解しました。
「いやっ！！あっ…！やめて！やめてください！！」
おじさんのペニスは私の中で硬さを増し、動きも早く
なっていきます。
「お願いです！中は…あんっ！！あ――っ！！！」
私の叫びを無視してひときわ深くおじさんのペニスが
私の中に突き刺さされ、私の子宮口を押し上げた瞬間。

おじさんのペニスが私の中で跳ね、
私の膣内に精を吐き出し続ける間
私は声にならない叫びをあげる
ことしかできませんでした。

私の膣内を満たしていく感覚と私の頭を満たしていく絶望感に身を震わせていると、おじさんは体を起こし、私の中をさらに蹂躙しはじめました。

「あっんー！！ひぐっ！あああっ！」

セックスについては本で読んだこともありましたが、男性は一度達すると性欲が収まると思っていました。ところがおじさんはまったく収まる感じもなく、私を犯し続けます。

「ああッ！あっ！あっ！…きゃんっ！」
「良い声だすじゃねえか、嬢ちゃんそれに
ま○こもキュウキュウ締めつけてくるぜ
…おおっ！」
おじさんは私の乳房を弄び腰を打ち付けながら
耳元で私の快楽に対する反応を逐ささやき
かけてきます。
立て続けに行われる行為に、私の身体は
雌として本能に火がついていました。

「そんなにおじさんの子種が欲しいのか」
私はおじさんの言葉に首を横に振って
ささやかな抵抗を試みますが、おじさんは
しっかりと私の身体を抑え込むと
また私の中で精を放ちました…。

性感を高める薬は私だけでなくおじさんも飲んでいるのか
何度達しても私を放してはくれません。
私は次第に身体に小さな力も入らなくなり、おじさんの
なすがままになっていきました。

おじさんはそんな私の身体をむさぼるように、時には唇を奪い
時には身体のありとあらゆるところに舌を這わせていました。
もちろんその間おじさんのペニスは私を貫き続け、私に途切れる
ことなく耐えがたい快感の波を叩きつけてきます。

もはや抵抗する気力さえなくなった私は、ただ快楽を受け入れながら、おじさんの欲望を身体の奥で受け止め続けました。
無理やり絶頂に押し上げられ続けて気を失ってもお構いなしにおじさんの凌辱は止まることなく、私は強烈な性の刺激に目を覚ましては気を失うことを繰り返しました。
やがて日が落ち、あたりが暗くなってもなお私は犯され続けたのでした。

気が付いたら朝になっていて、私はひとり取り残されていました。
一瞬、昨日のことは夢かと思いましたが、私の膣内に残った
おじさんの感触と溢れ出ている精液、そして頭に残る痺れるような
快感の残滓が、それが現実であったと容赦なく突き付けていました。

外には馬の気配がなく、荷台ごと放棄していったようでした。
ここは街道から離れていて、野盗などもいるはず・・・。
明るいうちに安全な場所まで戻らなければ危険です。
でも・・・私の身体は、しばらく動いてくれそうにはありませんでした・・・。

あとがき

この度はお手に取っていただきありがとうございます。
今回はPixivに投稿した同タイトルのイラストから派生する形で
本を作ることとなり、自分なりにいろいろと詰め込んでみました。
成人向けの本を作るのは初めてなので甘いところも多いと思いますが
楽しんでいただけましたらうれしく思います。

街に出かけたシオリが
帰ってこない

発行日:2019年12月30日
発行者:Corloth
連絡先:twitter.com/corloth1
印刷所:株式会社グラフィック様